『I Love Labrador ♥』

＊ 良舞良動留事始 ＊

大泉 真佐子

『皆さーん、ごはんですよ。 ハイ スィット！』 午後七時三十分我家の犬の食事の時間である。 此の号令と共に、全部の犬達が一列にきちんと弧を描いてお座りをする。 尾を振りながら伸上がる様にして、今か今かと待っている子もいれば、左右の頬から氷柱の様なよだれが垂れ下っている子もいる。 夫々に全神経を集中し、私の動きに見入っているが、不思議にも必ず決った場所に同じ犬が座る。

全ての犬の前に食事が並べられたら『ハイッ どうぞ！』で、一斉に食べ始めるのだが、一頭で飼われている犬に比べて、我家の犬達はすこぶる速い。 アッと言う間に食べ終り、『もっとほしいなー。』と言う顔をする子、終ったらすぐ違う所へ行って遊び始める子、回りの事は一切気にせず、ゆっくり噛んでゆっくり食べるマイペース型の子・・・・と食べ方ひとつをとっても色々であるが、隣の犬の食事に手を付けたり、喧嘩になる様な事は全くない。

我家には、ラブラドールの雄ジャック（ブラック9才）、オージィー（イエロー2才）、雌ミジィー（イエロー7才）、レア（イエロー4才）、ベス（ブラック4才）、ティナ（ブラック4才）、プリムローズ（イエロー生後3箇月）、ゴールデンの雌サクラ（2才）の8匹の犬達がいる。

よく人から『大きな犬をこんなに飼っていて、さぞ大変でしょうね。』とか『よく食べるんでしょーね・・！。』とか言われます。 後の方のよく食べる・・・は、正しく凄じいものですが、8匹の犬がいても大変、とは思った事が一度もない。 それにしても、なぜこんなに犬が増えてしまったのだろうか・・・と自分でもふっと考える事がある、それは矢張一番最初に飼った犬が飛切り良い犬だったからである。

私は、物心付く頃から犬や猫に囲まれて育ち、ペット屋さんで手に入るペットというペットは全て飼い尽くした。真黒い家鼠の子も育てた事がある。　これは、ゴキブリホイホイに貼り付いていたのをはがしてペットにしたのである。　又、父の仕事の関係で、6才の頃には、動物園にもフリーパスであった為、毎日曜日は動物園で一日を過した。

マーゲーキャットやビントロング（クマ）の子を抱っこしたり、コンドルのオリに入って下に落ている鶏の頭を棒でつついて遊んだり・・・色々な動物達に接する機会に恵まれたせいか、無類の動物好きになった。　私の回りにいた犬達も様々であったが、中型小型犬が殆どであった為か、いつの頃からか、自分で責任を持って飼う時には大きいのにしようと心に決めていた。

そろそろ犬が飼えそうだ・・・となった時に、私の姉と二人で色々相談した結果、ラブラドールとなった。　それは、数ある犬種の中でまず毛の手入が難しいものや定期的にカットが必要なものはダメ、神経質で無駄吠えの多いのも困る、体の弱そうなのもダメだし、勿論バカなのは最もダメ！・・・と不的確のものを省いていった結果数種が残ったが、中でも幼い子供と遊ばせても安心していられて、最も家庭犬として扱安い犬は・・・ラブラドールとなったのである。

それからは、とんとん拍子で、姉にはイエローの雌ミジィー（後で我家のメンバーになるが）、私にはブラックの雄ジャックが手に入ったのである。　ジャックはその時2才に近かった。　私は出来れば子犬から飼い育てたかったが、今でも忘れはしない、初めてジャックに会ったあの日を・・・ピッカピカの黒いコートに落着きと優しさが満ちた、ハシバミ色のもの言う瞳を見て迷わずジャックに決めた。

かつての駐日大使であったライシャワーさんが『クロ』という名の黒いラブラドールの雄を飼っていた。　何かの雑誌にこのクロと氏が写っているのを見た事があるが、ラブラドールに黒がいるのを此の時初めて知った、まず其頃の日本では見られなかった。　ジャックと歩いている時には、大抵黒い土佐犬に見られたし、ある時ショーに出していざこれから審査という時に、審査員から『これ、何だたっけ・・？』と聞かれてア然とした事もあった。　ジャックが我家に来てからは、特に私の生活のリズムは大きく変った。　朝寝坊が得意だった私は、起た時には既に遅し、

主人は会社に出かけた後だったり、寒い冬は冬眠でもしているかの事くコタツで殆ど一日過したり・・・それが一変し、未だ暗いうちから起だしてジャックを外へ連出したり、散歩に出掛けたり、全てに関して健康的で規則的な毎日となった。　何時如何なる所へも不可能でない限り一緒に連て行き、週末には、海や山等犬も楽しめる場所へピクニックに出掛けたり、段々増える犬友達のお宅へ伺う事も多くなりジャックのおかげで今迄にない楽しい思い出や人との出会が沢山あった。　そういう毎日の生活の中で、一日一日過るごとにこの犬の素晴らしさを発見して行った。

ジャックだって悪戯でやんちゃな時代もあったに違ないだろうが、まずこんなに飼い安い犬は初めてだった、これは私達の期待を遙かに越え、その時その情況によって自分なりに考えを持って行動し、又こちらの考えている事を的確に察する利発さには驚きを覚えた。　これ程人間の生活に深く自然に調和出来る犬っているだろうか・・・とつくずく感じた。

犬連れの旅行も実に楽しい。　何年前になるだろうか・・・佐渡の二つ亀へキャンプに行った事がある。　新潟からのフェリーで、仕方ないとは思いながら揺れもひどく、空気の悪い車の中に入れておくのが可愛そうで、出来れば私達と一緒に甲板に出して旅の気分を共に楽しませてやりたかった。　ダメで、もともと思いながら一応尋ねてみると『本当はいけないんだけど・・・おとなしそうだから良いですよ。』と案外スムーズな答が返ってきた。『これは何ていう犬ですか？』『ラブラドールといいます・・・あの・・盲導犬に使われている種類の犬です。』『へーじゃあ頭が良いんですね。すごいなー。』　その人は、何処かへさっと消えると又すぐ戻って来て、その小脇に抱えて持って来たゴザを『これどうぞ使って下さい。』とジャックの為に貸してくれた。

出だし良ければ終り良い、で、島に着いてからも、恐る恐る尋ねてみたものの、全ての飲食店が犬連でもＯＫであった、　又ジャックのマナーも百点満点だった。

二つ亀は、とても美しい所で、特に波静かな大きな入江は絵でも見ている様だった。　あまり奇麗な海なのですぐ潜りたくなるのだが、私が潜るとジャックが大変な心配をする。　海中に半分入り、私が潜ったその場所一点をじっと見つめ心配でしょうがないと言った顔で動こうとしない。　何回も同じ心配をするので、潜るのは止め、一緒に並んで泳ぐ事にした。　犬をよく海へ連て行き、海に向ってボールを投て遊ぶゲームはよくしていたが、犬と並んで泳ぐ事がこんなに楽しいとは此の時初めて知った。　程良い間隔を（互いに邪魔にならない様に）保ちながら、歩く時

と同じ様に私のピッタリ左に付いて速度も合せて泳ぐのである。　私は、横泳ぎをしてジャックを見ながら海水浴を楽しんだ。　水好きのラブの事、こちらが疲れ果てても未だ物足りなそうな顔をしている。　『いいよ、独りで行っておいで。』と言うと、御自慢のオッターテイルをピッピと振りながら嬉しそうな顔をして、バシャッ、バシャッ、と海に入って行く。　入江の中を丁度ジャックの頭が米粒位の大きさに見える範囲を、ぐるっと一回りして『あー、気持良かった。』という顔をして戻って来る。

ジャックが一緒だったというだけで、見知らぬ人々が気軽に声を掛けてくれたり、親切にして下さったり格段に楽しい旅行になった。

それから間もなく、九月、姉が北海道へ引越す事になり、ラブには珍しく冷え症のミジィーさんが、一先ず北海道行きを断念し、我家に仲間入りする事になった。　当時、彼女はうら若き絶世の美犬であった。

ジャックとミジィー、此の二匹の性格というか、習慣の対比はあまりにも違っていて面白い取合せになった。　いかにも犬らしいジャックに比べ、ミジィーは非常に人間臭い犬である。　夫々の個性は別にしても、この点は育った環境によるものだと思う。　恐らく犬として、犬舎等で育ったと思われるジャックは、犬である自分をよくわきまえていたが、その点ミジィーは姉の所で、一才半迄家の中で飼われ人間と共に育った。　当然自分は、人間だと思い込んでいる部分があって、かなりずずしい所もあるが、私達の、それも相当複雑な会話も理解し、特に人との接し方や、反応の仕方が人間に非常に近かった。

先ず、『行く（散歩を連想する言葉）』『食べる』『美味しい』『暖かい』『良いねー』『凄い！』『あげようかなー』等、自分に得になりそうな言葉は絶対聞き逃さなかったし、その雰囲気を感じただけでも、私達の先手を打って行動した。

『今日は、ゴミの日だわ・・・。』と私が独り言を言いながら、大きなビニール袋を両手に下げて外へ出ると、何時の間にかミジィーがくっついて来ている。　これは変だ！　ジャックとミジィーは、庭に居た筈だし、庭の戸もしっかり閉まっている筈なのに・・・。　おかしい、何処からどうやって出たのかしら、と思いながらゴミを出し終え戻ってみると、自分で縁側の戸を開けて、たまたま開け放してあった玄関のドアから私を追い掛けて来たのだ。　黒

い点々とした足跡が家の中を横断していた。
此の時ばかりに限らず、日頃叱る迄は至らなくても小言を言いたくなる様な時もあった。　ミジィーを呼付けて、『ねぇー、こういう事をされると本当に困るんだけど・・・etc。』と始まると、ミジィーはいかにもうるさそうに『あっ、あ～ん。』と声を出してあくびをし、三十秒もしないうちに、彼女のまぶたは段々重くなり、二、三度まばたきをしたかと思うとコックリ、コックリ船を漕いで居眠りを始める。　本当に居眠りをするのである。
こんな調子のミジィーだから、なまじ人間を相手にしているよりもずっと面白い。　きっとミジィーが天国に召されても、その思い出話しは山程あって永遠に続ずくのではないかと思う。
それにしてもジャックとミジィーは大変仲が良かった。　見ていると俗に言うおしどり夫婦そのものだった。　当然と言えば当然なのだが、ミジィー二才、ジャック三才の時に、二匹の間に七匹の子犬が生れた。　本当に可愛かった。
誰でも、一番最初の繁殖は特に、思い出深いと聞いているが、今でもこの七匹の幼い時の姿は、はっきりと、このまぶたの裏に焼付いている。　私も、そして私の子供達にとっても、出産、子育て、離乳、そして子犬との別れ・・・と繁殖の全てを通して、犬達から学ぶ事が沢山あった様に思う。　お金では決して買えない素晴らしい体験をした。